地域で挑む〝次の農業〟のかたち

Midorist Vol.15

弘法大師ファームみつまた
奥山紀昭さん、角方孝行さん（福井県越前市）

福井県越前市の三ツ俣、横根、北山――複数の集落にまたがる田んぼを舞台に、ある農業法人の挑戦が続いている。農事組合法人弘法大師ファームみつまた。今や経営面積は35haだが、その原点は、4haの水田からのスタートだった。

平成20年、品目横断的経営安定対策の開始をきっかけに、弘法大師ファームみつまたの代表である奥山紀昭さんは、「これからは個人で農業をやる時代ではない」と考え集落営農をスタートさせた。三ツ俣、横根、北山に加え、丹生郷や高森へと広がり、農地を徐々に集積していった結果、今では地区の約8割の農地が集まるまでになった。しかし、集落営農を担う中で、奥山さんはある違和感に気づく。「昔は、カエルやトンボがたくさんいて、夜にはフクロウの声がして、ホタルも飛んでいたんです。それが、いつの間にか見えなくなっていて…。」その現実が、農薬の影響を強く意識するきっかけになった。

転機は約17年前。2009年「コウノトリを呼び戻す農法部会」が越前市西部地区（白山、坂口地区）の9名の農家で設立されたことだった（JA越前たけふの部会として設立）。この部会は、コウノトリが日本で最後に住んでいた地域の一つである越前市に、コウノトリを呼び戻すことを目的に、農薬・化学肥料を使わずに、生物多様性に配慮した稲作に取り組む。設立の翌年にはコウノトリが飛来し、越前市内に107日間滞在したことで、地区外の農家も部会に参加するようになった。奥山さんもこの1人だ。奥山さんはまずは1ha・3枚のほ場でこの農法による米の栽培を開始した。この部会で生産されたお米は、JA越前たけふの地域ブランド米『コウノトリを呼び戻す農法米』として販売されており、越前市もこの環境保全型農業を後押ししたことで、「コウノトリを呼び戻す農法」は地域全体へと広がっていった。今では越前市では、コウノトリがいる田園風景が当たり前になりつつあるという。

奥山さんは農地の一部でコウノトリを呼び戻す農法に取り組みを始めたが、さらに取組を広げて行く際には、慣行栽培からいきなりすべてを有機栽培にするのではなく、福井県特別栽培農産物の

認証Ⅰ（栽培期間中農薬・化学肥料不使用）や、認証３（栽培期間中農薬５割以上減・化学肥料不使用）から取組を始めた。しかし、中山間地域の農地ではどうしても生産性が落ちる。付加価値をつけて販売するためには、有機で勝負するしかないと考えた奥山さん。約４年前「有機ＪＡＳを目指そう」と、次のステップに踏み出すことを決めた。

現在、弘法大師ファームみつまたでは、有機ＪＡＳや有機転換期間中の特別栽培が、経営面積の半数以上になっている。有機はもはや一部の取組ではなく、経営の中心になりつつあるのだ。

この経営を支えている１つの要因は、確かな販路だ。神戸のバイヤーとの取引（大豆・大麦中心）、道の駅「越前たけふ」、ＪＡのスーパーマーケット「コープ武生みどり館」、百姓の館での直売、ふるさと納税など。さらに、有機大豆は味噌原料として地元の味噌店に出荷予定している。有機ＪＡＳのそばについても、新たな引き合いが生まれているそう。

もう１つの要因は、越前市が有機栽培が盛んな地域であること。このため有機栽培に取り組む仲間が多く、技術面だけでなく経営面でもアドバイスを受けることができるという。とくに奥山さんは、越前市内の大規模先進的有機農家を頼りにしており、販路についても紹介してもらったという。また、越前市も令和６年に「オーガニックビレッジ」ではなく「オーガニック都市」と宣言したとおり、栽培マニュアルの作成、情報発信等、市を挙げて有機栽培の推進に取り組んでいる。

さらに、当時『コウノトリを呼び戻す農法米』は、特別栽培農産物認証Ⅰの取り扱いしかなく、有機ＪＡＳ米としては取り扱ってもらえなかった。そこで、弘法大師ファームみつまたでは、有機ＪＡＳの独自ブランド米『越前こうのとり米』の販売を開始したことで、付加価値をつけて販売することも可能になった（なお、現在ではコウノトリを呼び戻す農法米も有機ＪＡＳ米の取り扱いが始まっている）。

「結果的に、有機の方が経営としてプラスになった。」と奥山さんは語る。環境保全型農業直接支払や市の支援も後押しとなり、〝続けられる有機〟が形になった。

もちろん、課題もある。除草の手間、ぬかるむほ場、鳥獣被害…。特に山手では、そば以外の作付が難しい状況もあるというが、その中で進めているのが、機械化と基盤整備だ。乗用型除草機やアイガモロボットの導入、ＧＰＳ付き田植機の活用、暗渠整備による排水改善（これにより麦・大豆の収量は大幅に増えたそう）、ほ場の区画拡大など、こうした積み重ねが、収量の安定にもつながっている。実際に、有機水稲では目標５俵／10ａに対し６俵を超える収量も達成しており、とくにいちほまれは約７俵の収量だった。

弘法大師ファームみつまたは、県のリーディングファーム（売上１億円を超える企業的な農業経営体のことで、福井県が育成を図っている）にも指定され、経営は着実に成長している。また、農林水産省の「みえるらべる」にも関心を示す。

奥山さんは、「従業員に定着してもらうためには、いかに将来展望を描いていけるかが重要だと思っています。有機栽培を基幹とした経営方針を理解し、一緒に取り組んでくれる、将来を担ってくれる若手従業員を３名確保することができました。今後は、若手従業員が経営を進めやすいよう、また、時代の流れに柔軟に対応することができる

有機JAS認証を受けるために準備した資料

よう、株式会社に移行したいと思っています。」と話してくれた。

一昨年の9月に弘法大師ファームみつまたに入社した角方さんは、農業は全く初めての分野だという。しかし、重機の扱いは前職の経験を活かせるし、植物を育てること自体が楽しい、と生き生きと話してくれた。農業の、しかも有機栽培にいきなり足を踏み入れた角方さんが、新しい風を吹き込んでくれる、と代表の奥山さんも期待を寄せる。

ちなみに弘法大師ファームみつまたの「弘法大師」は、元山中にあった旧集落にある三ツ俣町弘法大師堂に弘法大師が祀られていることに由来している。この名称を法人名につけるにあたり、総本山金剛峯寺にも確認したとか。そんな小話もしてくれる奥山さんの語り口は、終始穏やかでやさしかったが、その言葉にはこの地域の農業を次世代に継承していきたいという強い意志が感じられた。

かつて見えなくなった、生きものたちの風景を取り戻し、農業でしっかりと生きていくこと。この両方を、地域で実現する。弘法大師ファームみつまたの取組は、環境と経営の両立を体現しているモデルの一つだ。

地域を守っていくために頑張りたいと話してくれた角方さん

DATA

【弘法大師ファームみつまた】

福井県越前市横根町13-15-1

農法：栽培期間中農薬・化学肥料不使用、有機JAS等

品目：米、そば、大豆、大麦

FARM.MITUMATA

Writer: 首藤